

「みずや」(水屋)の意味の地域差

船木礼子(橋本礼子)

1. 「みずや」(水屋)とは——辞典の記述から——

「みずや」(水屋)という名詞は生活の中に溶け込んださまざまなものを指す。ただし、時代や使用域(あるいはジャンル)、地域などによってそれが指すものは異なる。例えば各地の地震被害の報告書を見ると、(1)の兵庫県、(2)の鹿児島県の「水屋」は屋内の可動性のある家具、(3)の宮城県大和町の「水屋」は武家住宅のうち母屋ではないほうの建物(母屋の土間の裏手にある付属屋)を指していることがわかる。

- (1) 「建物の下敷き」が8割と圧倒的に多く、次いで「タンス・水屋などの下^マ敷き」と「ピアノの下敷き」が合わせて1割を占めている。(大西他1996「兵庫県南部地震における人的被害に関する研究」より)
- (2) (47) 調査地点：鶴宮之城町湯田
事務所のキャビネット、水屋が倒れた。コピー機が西に約1m移動した。
(48) 調査地点：鶴田町湯田原
タンスや水屋が倒れ食器等が破損した。(福岡管区気象台他1999「1997年3月26日と5月13日の鹿児島県薩摩地方の地震調査報告」pp.130-131より)
- (3) 79 工事名称：大和町指定文化財旧宮床伊達家住宅災害復旧工事
工事内容：水屋屋根瓦修繕、母屋屋根茅修繕 (大和町総務まちづくり課他2012「2011・3・11東日本大震災の記録」より)

そこで本稿では「みずや」の意味と使用域と地域性について整理を試みる。

まずは辞書の記述を確認したい。『日本国語大辞典 第二版』を見ると、次の7つの意味が示されている(以下、辞典に掲載された用例や出典、資料番号は省略し、《 》で音訛形を示す)⁽¹⁾。

- ① 社寺で、参詣人が手や口をすすぎ清めるための水をそなえてある所。
- ② 茶の湯で、茶室に付属し、茶事の用意をととのえる場所。茶器を備えておき、使用後に洗淨したりする。焔、棚、物入、簀子流しなどを備えてある。置水屋という移動式のものもある。水やり。
- ③ 食器類を入れておく箆笥様の戸棚。茶箆笥。
- ④ 水を扱うところ。台所。
- ⑤ 飲料水を運んで売り歩くのを業とする者。
- ⑥ 夏、冷水に白玉と砂糖を入れて売る者。水売り。

(14)

⑦ よく洪水の害をうける低地の農村で、避難用に建てる高い土盛りをした家。

語構成は「水」と「屋」の組み合わせであり、①②④は水を使う施設や部屋（屋根のある場所）、⑤⑥は水を商う者（～屋）、⑦は水害のある時に使用する建物（家屋）としてのごく自然な命名である。一方③は家具の名前で、他とは異質だ。②や④からの派生が考えられそうだが、詳らかでない。

使用地域が限定されるものもある。⑦が使用語彙なのは水害多発地帯に限られる。ただし小学校社会科（5年生）の単元「わたしたちの国土」の「低い土地のくらし」で、「輪中」などと共に扱う用語なので、全国的な理解語彙（知識としての語彙）である可能性もある。

家庭の日常語である食器棚や台所の意味として「みずや」を使う地域にもかたよがりがあるようだ。『日本国語大辞典 第二版』の「みずや」に続けて記されている方言の項や『日本方言大辞典』（小学館）の「みずや」には、次のように書かれている⁽²⁾。

- (1) 炊事場。台所。宮城県・新潟県・岐阜県飛騨 《みじゃ》 岩手県 《みんじゃ》 青森県・新潟県・富山県 《みんじょー》 新潟県 《みんざ》 山形県 《めんじゃ》 富山県
- (2) 台所の流し。流し場。流し元。青森県・山形県・新潟県・岐阜県飛騨・広島県山形郡 《みじゃ》 青森県・山形県・新潟県 《みーじゃ》 新潟県 《みんじゃ》 青森県・秋田県・新潟県 《みんじょー》 新潟県 《みざー》 山形県 《みぞや》 秋田市 《めんじゃ》 青森県・秋田県・富山県・石川県
- (3) 洗いをためておくおけ。《みんじゃ》 新潟県
- (4) 流し場に据える台。《みんじゃ》《めんじゃ》 青森県
- (5) かけひの水を受ける水槽のある所。岐阜県
- (6) 水車。長野県・岐阜県
- (7) 食器などを入れておく戸棚。茶だんす。ねずみ入らず。奈良県・広島県・愛媛県・高知県 《みっじゃ》 兵庫県
- (8) 貝、なめくじ（蛞蝓）。香川県

また『日本国語大辞典 第二版』には「みんじゃ【水屋】」も立項されており、「「みずや（水屋）」の変化した語」として、「台所の流しもと。また、水使い場。炊事場。台所。はしり。津軽から山陰までの日本海沿岸でいう」と説明がある（音化形と地域は省略）。

これらの辞書の記述は既刊の方言資料の記載内容が元になっているので、少なくとも過去にその地域の方言として「みずや」がその意味のものとして記録されたことがあるという点で信用できる。こうしてみると、〈1〉炊事場や〈2〉流し場の意味で「みずや」が使われたのは東北地方と中部地方の日本海側（北側）といえる。〈3〉洗いをためておく

おけ、〈4〉流し場に据える台も、〈2〉流し場の派生的なものと言えらるだろう。これに対し、〈7〉食器などを入れておく戸棚の意味の「みずや」は近畿から西の地域にかたよっている。

もう一つ、『現代日本語方言大辞典』（1992-1994年刊、明治書院）も見ておく。これは全国共通語引きの辞典で、全国各地の臨地調査で得た情報を見ることができる。

「だいどころ【台所】」の項を引くと、全国的に「ダイドコロ」・「ダイドコ」、「オカッテ」・「カッテバ」、「ナガシ」、「スイジバ」などの語が並び、そのほか「ニワ」（福島県会津・愛媛）、「オチマ」（愛媛）、「タナマエ」（富山）・「タナモト」（大阪・兵庫）、「ハシリ」（鳥取）、「カマヤ」・「カマドコ」（高知・福岡・佐賀・大分・宮崎）、「ナカザ」（鹿児島県甕島・沖縄）などの語が並ぶ。このなかで、富山県五箇山に「メージャ」、長野県秋山に「メツチャ」がある。この「メージャ」「メツチャ」は「水屋」由来の語形だと考えられる。

また「たんす【箆筒】」の項では一般的な箆筒を各地でどう呼ぶかが示されているが、地域によってはいわゆる「茶箆筒」も挙げており、北海道から沖縄までの広い範囲で「チャダシ」「チャダンス」などが見られる。このなかで、鹿児島県に「ミズヤ（チャダンスに同じ）」との記述がある⁽³⁾。

こうした辞典の記述から、次のことが考えられる。水を使って炊事をする場所や炊事の水回りの意味での「みずや」のほう分布が広いこと、また富山県五箇山や長野県秋山郷といった古いことばが色濃く残ると考えられる地域で用いられることから、炊事をする場所などの「みずや」はより根本的な意味の古い語形として東北地方や中部地方などに浸透していたと考えられる。一方で食器棚の「みずや」のほうは、炊事場などの意味よりもかなり後になって、茶箆筒の普及と関わり合いながら発生し、西日本で定着したのではないだろうか。

2. 近代文学作品に登場する「水屋」——青空文庫コーパスから

小説や随筆などは、方言を利用して地域の特徴を示す作品では著者が方言だと認識している語も使われるが、一般的には全国共通語だと考えられている語で書かれる。そこで、全文検索システム「ひまわり」を使用し、近代以降の小説などの中で「みずや」（水屋）がどのような意味でどの作家のどういう作品に使われているかを確認してみる。選択したコーパスは「青空文庫_20191001（全て）」、検索キーは「水屋」、「みずや」である。念のため「水や」「みず屋」「みづや」「みづ屋」「みじや」「みっじゃ」「みんじゃ」も検索したが、用例はなかった⁽⁴⁾。

集まった91例を5つの意味に分類して表1に示す。分類は『日本国語大辞典 第二版』の①～④に沿ったが、⑤「飲料水を運んで売り歩くのを業とする者」と⑥「夏、冷水に白玉

(16)

と砂糖を入れて売る者。水売り。」は文脈上どちらか判別できないこともあるので、⑤としてひとまとめにした。また⑦「よく洪水の害をうける低地の農村で、避難用に建てる高い土盛りをした家」に当たる用例はなかった。「その他」は文脈情報が足りず、明確に判断できないものである。

①社寺の手水舎（14例）、②茶の湯の水屋（24例、「水屋棚」「置水屋」1例ずつを含む）は、多くが時代小説や、江戸期や明治期の風習を扱った随筆などで使われている。①②は中世以降用いられ今に至るもので、使用域が異なるものの全国共通語といえる。ここでは特に「水屋」の地域差に注目するため、辞典の記述から地域的かたよりがあると考えられる③食器類を入れておく筆筒様の戸棚と、④台所の意味の「水屋」の例について詳しく見ていきたい。

表1 コーパスで得られた「水屋」の用例数

分類	用例数	作品例
①社寺の手水舎	14	中里介山『大菩薩峠』6例、林不忘『丹下左膳』3例など
②茶の湯の水屋	24	吉川英治『私本太平記』『新書太閤記』13例、泉鏡花『鶴狩』『みさごの館』2例、岡本かの子『仏教人生読本』『生々流転』2例など
③食器類を入れておく筆筒様の戸棚	11	織田作之助、『世相』『俗臭』『夜光虫』4例、宮本百合子『日記』『雑沓』2例、火野葦平『糞尿譚』1例、夢野久作『あやかしの鼓』1例、佐々木味津三『右門捕物帖』1例、谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』1例、幸田露伴『幻談』1例、柳宗悦『手仕事の日本』1例、吉川英治『美しい日本の歴史』1例
④水を扱うところ・台所	18	吉川英治『私本太平記』『宮本武蔵』など11例、伊藤永之介『押しかけ女房』2例、山本周五郎『樅ノ木は残った』2例、柳田国男『こども風土記』2例、高村光太郎『智恵子抄』1例
⑤水等を商う者	21	岡本綺堂『箕輪の心中』7例、宮本百合子『獄中への手紙』4例、芥川竜之介『追憶』3例、吉川英治『新書太閤記』2例など
その他	3	

2.1. 食器類を入れておく筆筒様の戸棚の「水屋」

食器などを入れる茶筆筒相当の「水屋」の例は青空文庫コーパスで11例集まった。大阪市生まれの織田作之助の作品の例が4例と多い。（下線は筆者。以下、用例を示す際は紙幅の都合で改行を／で示す。出典情報は主に「青空文庫」データによるが、部分的に『日本大百科全書（ニッポニカ）』などで補っている）

(4) 伝三郎の妻は、千恵造の結婚のために、随分金を使った。タンス、本箱、机、椅子、座蒲団、水屋、雨傘、洗面器の類まで買い与えたので、へそ繰りを全部投げ出した上に、借金が出る始末だった。（織田作之助『俗臭』、初出『海風』第5巻6号、1939年、海風社）

(5) 道子は湯呑みを出そうとして、水屋の戸をあけようとした。／その時、いきなり

はいつて来た男が、／「おっと……、それ、あけちゃ困りませ」と、道子の手を払おうとした。(織田作之助「夜光虫」、初出『大阪日日新聞』1947年)

この(4)(5)から「水屋」は結婚時に購入するような基本的な生活に欠かせない家財道具(家具など)で、湯飲みなどの食器を入れるものであることがわかる。また(6)～(9)からは、食品や酒なども入れること、通気のための金網が張られている場合もあることが見て取れる。さらに(7)(8)(9)からは「水屋」が女言葉なのではなく、男性視点で綴られた地の文でも、上品ぶったりすることもなく使われる語だということもわかる。

(6) 「夜中におなががすいたら、水屋の中に餅がはいってますから……」勝手に焼いて食べる、あたしは寝ますからと降りて行こうとするのを呼び停めて、(以下略)
(織田作之助「世相」三、初出『人間』1946年4月号)

(7) 茶の間へ上って、電気焜炉のスイッチを入れると、横堀は思わずにじり寄って、垢だらけの手をぶるぶるさせながら焜炉にしがみついた。／「待てよ、今お茶を淹れてやるから」／家人は奥の間で寝ていた。横堀は蝨をわかせていそうだし、起せば家人が嫌がる前に横堀が恐縮するだろう。見栄坊の男だった。だからわざと起さず、紅茶を淹れ、今日搦いて来たばかりの正月の餅を、水屋から出して焜炉の上に乗せ乍ら、／「どうしてた。大阪駅で寝ていたのか。浮浪者の中にはいつていたのか」とはじめて訊くと、案の定へえとうなだれた。(織田作之助「世相」五、初出『人間』1946年4月号)

(8) それから困るのは、生物、煮物、焼物の類をうつかりその辺へ置くことが出来ない、ほんやりしてみると直ぐ食べられてしまふので、お膳立てをするほんの僅かな間でも、水屋か蠅帳へ一応入れて置かなければならない。いや／＼、もつとひどいことは、此の猫は臀の始末はよいが、口の始末が悪くて、とき／＼嘔吐するのである。(谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」、初出『改造』1936年新年号、第18巻第1号、『改造』1936年7月特大号、第18巻第7号)

(9) 朝早く、車体検査のため、沢田がトラックを運転して出た後、彦太郎は油で汚れた手を洗濯石鹸で洗って、柱に腰を下すと、昨夜残しておいた焼酎のあったのを思い出し、細目の金網の張ったみずやの中から一升徳利を取り出した。(火野葦平「糞尿譚」、初出『文学会議』第4号、1937年)

(8)の谷崎潤一郎は東京生まれだが、近畿地方に移住し3人目の妻の影響のもとで近畿の方言をある程度習得し作品に活用していたので、近畿での使用例とみて良いだろう。

(9)の火野葦平は福岡県生まれである。

次の(10)は京都の家具を紹介する文章で使われている例だ。著者の柳宗悦は序で、この本を戦時中に書いたと言い、内容は「大体昭和十五年前後の日本の手仕事の現状を述べたもの」だとしている。つまり「水屋」は1940年前後、当時の文化人に関西仕様の置き戸

(18)

棚の名称として知られていたということがわかる。「勝手許」つまり台所で好んで用いられるという使用場所の情報、引き戸や引き出しが多いという形状の情報も得られる。

- (10) 木工具の領域を見ますと、京都出来のもので心を惹くのは「水屋」と呼ぶ置戸棚で、好んで勝手許^{かっぺもと}で用います。形に他にない特色があり、洋式の模倣品よりどんなによいか知れません。もっともこれは関西の式といってもよく、大津や大阪あたりまで見られます。引戸や小引出の多いもので、しばしばその横棧^{よこざん}には透彫を施します。つい先日までは鉄金具の引手で、ほとんど円形に近い肉太のものがありました。これらの棚や箆筒類を齧ぐのは夷川で、全町家具の通りであります。(柳宗悦「手仕事の日本」、1981年刊『柳宗悦全集 著作篇第11巻』筑摩書房)

ただし東京出身の宮本百合子も(11)(12)のように使っている(2例)。何を入れるものか、どのような形状かは分からないが、二階に置くような家具であることから、ここでは当時の台所に置くような、食器や食品をしまう実用的な収納家具ではないと考えられる⁽⁵⁾。ちなみに宮本百合子は(13)(14)のように、圧倒的に「戸棚」や「食器棚」のほうをよく使っていることから、彼女の言う「水屋」は織田作之助の「水屋」とは異なると思わせられる。

- (11) 五月十五日 土 (中略) 午前中には元の部屋を片づける。書き損じの原稿をやりきすて、新しい方にみずやなどを持ち込む。(宮本百合子「日記」1920年、『宮本百合子全集 第23巻』新日本出版社、1979年刊)
- (12) 部屋として特別なところがあるのではなかった。二階の客間の裏に水屋がある、その北向きの長四畳を使っているのであった。(宮本百合子「雑沓」、初出『中央公論』1937年1月号)
- (13) あ、バンでもせめて買ってくればよかった！ 悲痛な感じで自分は戸棚にしまつて来た茶の包とサトーを思い出した。(宮本百合子「日記」1930年、『宮本百合子全集 第23巻』新日本出版社、1979年刊)
- (14) (略) 食事中なる丈さけたいと思います。配膳室には、食器棚、料理の仕上げをする位の意味で瓦斯、周囲の壁は、タイルででも(以下略)(宮本百合子「書齋を中心にした家」、初出『住宅』住宅改良会、1922年9月号)

なお、食器棚の意味ではないのだが、茶道の用語「水屋棚」「置水屋」を、別の家具の説明するのに用いていた例が2例あった(②茶道の水屋として集計)。これらは話題にする道具の説明をするために、茶道の「水屋棚」およびそれと同等の機能を持つ、作り付けでない家具としての「置水屋」を例に出している。

- (15) そうした風潮が時の官権へいかに腐心して媚びを競ったかという実例に、当時、吉原あたりでは“ままごと棚^{だな}”と称する一つの名物を生んだと「匏庵遺稿」は書いている。／誰が考えたのか。／指物師の上手に作らせた五尺ほどな小棚の多い水屋棚^{みずやだな}

を作らせ、それに数々な珍味佳肴を入れ、俎板、庖丁のたぐいまで、ふさわしいのを添え、或る折、田沼の慰めに送ったらしい。すると忽ちその好評がまた拡まって、やれ花見に、やれ隅田川の船遊びにと、ほかの権勢家への贈答にも利用され、指物師は巨利をばくしたという事である。文字どおりなこの大人の、“ままごと”棚一組の価は、当時の金で並製七、八両から上棚だと十五両もしたとある。(吉川英治「美しい日本の歴史」、「“ままごと”棚”世相」、初出『週刊文春』1959年)

- (16) 酒の好きな人は潮間などは酒を飲みながらも釣る。多く夏の釣でありますから、泡盛だとか、柳蔭などというものが喜ばれたもので、置水屋ほど大きいものではありませんが上下箱というのに茶器酒器、食器も具えられ、ちょっとした下物、そんなものも仕込まれてあるような訳です。万事がそういう調子なのでですから、真に遊びになります。(幸田露伴「幻談」、『露伴全集』第6巻、岩波書店、1953年刊)

(15) は横浜生まれの吉川英治が江戸期の「ままごと」棚を紹介している文章であるが、「五尺ほどな小棚の多い水屋棚」に「珍味佳肴」や「俎板、庖丁のたぐいまで、ふさわしいのを添え」て田沼意次に贈ったとある。「ままごと」棚であるので小さいが、細々とした物が収納できる棚があり、酒の肴や器が入れられるものだったようである。(16) は江戸・東京出身の幸田露伴が、夏の釣りに持って行く、茶器酒器、酒および酒の肴も入れられる可動式(作り付けでない)収納箱を紹介するのに「置水屋ほど大きいもの」ではないと説明している。どちらも読者に具体的な物を思い浮かべさせるために、類似物として茶道の「水屋棚」「置水屋」を引き合いに出し、そこに入れる物として常とは異なる物(酒や肴など)を説明しているわけだ。吉川英治も幸田露伴も、茶道の「水屋棚」「置水屋」が当時の読者の常識であることを前提にして綴っているといえる。

こうした例から考えるに、まず炊事場に「棚」と呼ばれる収納家具があり、また茶道の「水屋」「水屋棚」「置水屋」などが共通理解のものとしてあった。しかし近代の作家が時代物ではなく近代の描写のなかで「水屋」を日常的な生活の場の食器や食品などを入れる家具の名称として使っているのは大阪以西がほとんどで、やはり③の意味の「みずや」は西日本で浸透しているものといえるだろう。

2.2. 水を扱うところ・台所の意味の「水屋」

水を扱うところ・台所の意味で「水屋」を使用している例は18例あった。(17) のような吉川英治の小説が11例、山梨県出身の山本周五郎『縦ノ木は残った』が2例と、歴史小説での用例が多い。しかし伊藤永之介の「押しかけ女房」は戦後の地方を舞台に描かれている作品で、そこで(18)(19)のように「水屋」が使われたことには、作者が秋田県出身であることとの関連が想起される。

- (17) 「いえいえ先ほどから水屋へお入りになって、お湯漬の菜を手ずからお料理され、

(20)

ただ今、御飯を炊いておられますゆえ、そのすみ次第、これへ罷り出してお給仕をなさいましょう」／「なに、わしのために、飯を炊いておると」（吉川英治「新書太閤記」、初出「太閤記」『読売新聞』1939-1945年、「続太閤記」『中京新聞』他1949年）

(18) 源治たちより一足先に田圃から上つて来た初世は、水屋で昼飯の仕度にかかつていたが、折からの重い靴音を聞いて、戸口の方を振り返つた。（伊藤永之介「押しかけ女房」、『賣春婦』村山書店、1956年刊）

(19) 思いがけなく突然生きて戻つて来た長男と、差し向いで盃を重ねていた源治は、やがてゴロリと膳のわきに寝ころがった佐太郎に向つて、水屋の方にいる初世をチヨイ／＼と振りかえりながら、言い出した。（伊藤永之介「押しかけ女房」、『賣春婦』村山書店、1956年刊）

柳田国男『こども風土記』は民俗学の父ならではの随筆だが、そのうちの「こどもの新語」に下総のごっこ遊びの解説として台所の意味の「御水屋」が出ている。下総あたりでも昔は台所を「おみずや」と言っていたとの情報は重要である。

(20) 下総の海上郡ではオミツチャゴというのがこの遊びの名である。今ではあの辺でもあまり耳にしないが、もとは台所を御水屋といっていたので、それで煮炊きの真似を御水屋事といい始めたのであろう。安房半島に行くとケンゴトまたはケエヤドッコ、ケトというのは常の日の食事ごしらえで、その仕事をケシンといっている土地も他にはあるが、ケエヤドという語はちょっと解しかねる。これはカイヤドすなわち台所のことで、古語にもカイヤがあり、八丈島ではカイコヤとも呼んでいる。それが幼い者に採用せられたために、偶然に今も残っているのである。（柳田国男「こども風土記」、初出『朝日新聞』1941年）

関東あるいは秋田出身の作家の作品、あるいは関東地方の古い方言に関する記述で用いられていることから、水を扱い炊事を行う場所（台所・勝手）の意味の「みずや」は近代小説からも東日本にかたよっている可能性を指摘できるだろう。

3. インターネット上の投稿から

1.で確認した大型辞典では、用例を既刊の書籍などから集めて辞書を編むため、古い用例から整理されて示される。例えば『日本国語大辞典 第二版』では①寺社の「水屋」は中世から、②茶の湯の「水屋」は近世前期、④台所は近世中期から、⑤⑥水売りは近世後期からの例が、また③食器棚は近代（戦後）の例が示され、いつ頃から用例があるかという語の歴史を大雑把にみるにはよい。しかし、現在のことはよくわからない。

そこで、現在の「みずや」の情報を得るために、ウェブ上の投稿を参照してみる。

3.1.関西Lマガジンのコメント投稿から

筆者は2021年春に関西Lマガジンから「水屋」についての取材をうけ、その記事がLmaga.jp 6月28日(月) 18:45 に配信された⁽⁶⁾。この記事について関西LマガジンLmaga.jp ではyahooニュース「若者は知らない方言『みずや』って関西弁？ その意味と由来を聞いた」⁽⁷⁾ でコメント投稿を受け付け、配信翌日の6月29日までに51件の投稿があった。この記事を読んだ人が自由に投稿するものなので、投稿者の居住地域や年齢、性別などに網羅性はないが、「みずや」に関心を持っている人による自発的な投稿は貴重である。そこでこの51件の投稿者が明らかにしている範囲で、「みずや」の意味と使用地域、年齢層などを整理してみたい。

当然のことだが、51件の中には茶道の「水屋」および「水屋筆筒」だという投稿もあった(2投稿)。「水屋」を使用していた「祖母」は茶道を嗜んでいたとの記述も見られ、老年層女性には茶道用語を使用語彙としていた方がある程度存在することがわかる。

興味深いのは、オフィスの「お茶くみする場所」という投稿である(1投稿)。福岡市市役所で、食器などを備えたお茶くみする場所を「みずや」と言うということを20年前に職場で教えられたとの情報である。投稿者が教わったのが20年前ということなので、少なくとも2001年より前からそう呼んでいたといえる。

「台所」「炊事場」の意味で「みじゃ」「みんじゃ」を使用したとの情報は2投稿あった。秋田県由利本荘市の62歳の方が子どもの頃使っていたという「みじゃ」と、東北日本海側出身の人が、地元には使っていたという「みんじゃ」である。投稿数は少ないが、どちらも辞典の記述「津軽から山陰までの日本海沿岸でいう」と合致する。

投稿数が多かったのは「食器棚」としての「みずや」であった(20投稿)。地域の明示された投稿だけを見ても、愛知県西部、京都・京都市、大阪、和歌山、神戸、関西、長崎、沖縄と、ほぼ西日本である。使用していた時期についての言及もあり、祖母、母(80代の母)、お年寄りが使う、昭和30年代ごろまでは使った、母が若い頃は使っていた、といった説明とともに、投稿者自身にとっては理解語彙だと述べている投稿が12あった。西洋風の食器棚(サイドボードなど)に買い替えてからは「みずや」と呼ばなくなったという投稿者も2名いる。その一方で、今でも祖母も自分も使用すると書いている人もいる(1投稿、神戸の投稿者)。

それぞれがどういう家具を指しているか詳細は分からない。京都市の投稿者は、古い町屋だと台所(通り庭含む)に作り付けの食器棚があるところが多いので、部屋の中に置く茶筆筒のような家具を「みずや」と呼んだ可能性があると指摘している。目立つのは「はいらず」の指摘で、「はいらず」などと呼ばれる金網の張られた引き戸の部分があり、そこにお菓子や夜食、おかずの残りなどの食べ物を保管していたということが、懐かしい思い出とともに3名の投稿者に語られていた。

(22)

この「はいらず」は、「ねずみ入らず」「蠅入らず」「はいらず」「蠅帳」「はい帳」などと呼ばれる小型の家具や道具を指すこともある。冷蔵庫やラップフィルム等が普及するまで、食品の一時保存によく使われていた。通気が良いように網戸あるいは網の張られた傘のような道具になっていて、蠅などに汚染されないように食品をこの中にしまうのである。

図1、図2は1926（大正15）年刊行の『最新和風家具設計製作及仕上法』に示された「水屋棚」と「蠅入らず」の図の模写である。図1には「台所或は配膳室に於て食器を蔵するに使用する物にして、大きき前巾三尺、高さ三尺、奥行き一尺二寸」、「引違の二枚の板戸模様入の硝子戸も可なり」とす」とある。大正の終わり頃までは「入らず」は水屋の一部ではなく、図2の「蠅入らず」のような別の家具（高さ約2尺、巾約1尺）だったようだ。

この「入らず」の機能が、昭和期のいつからか「みずや」とよばれる食器・食品収納家具にも、ものによっては備えられるようになったということのようだ。

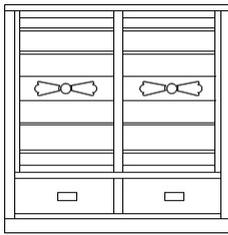


図1 水屋棚
(佐藤1926:p.107, 図50を模写)

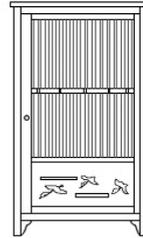


図2 蠅入らず
(佐藤1926:p.108, 図51を模写)

中には、自分は使わないが、漫画やアニメの『ジャリン子チエ』で「みずや」が食器棚の意味で使われているのを知ったという人もいた（3投稿）。

はるき悦巳の『ジャリン子チエ』、第17話「テツの孤独の巻」に初めて「みずや」が登場する（双葉文庫版では2巻、pp.44-49）。戦後の大阪の下町を描いた作品で、町の店や民家は木造、小学校はコンクリートなので高度経済成長期ごろかと思われる。茶の間（居間）の壁沿いに「みずや」、鏡台、衣類の箆筒、机が置かれ、部屋の真ん中に卓袱台が配置されている。炊事場（台所）は茶の間の隣の土間ようだ。描かれている「みずや」は木製の質素なものに見える。上2段はガラスなどの引き戸か、反射が描き込まれている。3段目は引き出し、4段目が木製の引き戸のに

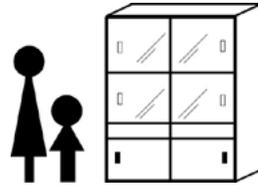


図3-1 『ジャリン子チエ』2巻に描かれた「みずや」の略図

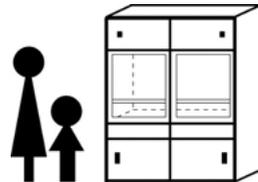


図3-2 『ジャリン子チエ』5巻に描かれた「みずや」の略図

見えるような絵柄である（図3-1に略図を示す）。5巻にも「みずや」は描かれるが、こちららは上一段目が袋棚、二段目がガラス戸だが中が広くなっている（図3-2）。どちらも高さは大人の女性（ヨシ江）より少し高い。この「みずや」には蠅帳部分はないようだ。なお年配の男性の台詞でも「みずや」と書かれているので、2.1の小説と同じように、大阪では男女とも使用する普通名詞になっていたと言える。

3.2. 「発言小町」のコメント投稿から

「みずや」が何を指すかということには興味が集まりやすいようで、読売新聞が運営する掲示板サイト「発言小町」でも、2013年7月21日に「胡瓜」さんがトピックとして書き込み⁽⁸⁾、それに対するレスポンスが2013年7月21～24日に119件あった（トピック主が投稿した2件を含む）。この119件のコメントについても、投稿者が明らかにしている範囲で「みずや」の意味、使用者の居住地域、年齢層などを整理してみる。

東京23区内の1名から、秋祭りの御神輿の「休憩場所」という意味で現在も使うという投稿がある。これによると、「水屋」では、御神輿の担ぎ手たちに振舞うお酒やつまみ等が用意されるが、こうした酒類・肴類は休憩場所を提供した家がお祭りの奉納として用意するのだという（「水屋接待」というそうだ）。いつも同じ家が水屋になるが、家によってそれぞれ用意する物に名物があって御神輿を担ぐ人たちの楽しみとして定着しており、「水屋」と聞くだけでウキウキするそうだ。台所や食器棚という意味では使わないという。

地域はわからないが、投稿者の祖母が一番立派な「離れ」の建物（母屋ではない建物）を「水屋」と呼んだとの投稿も1投稿あった。大きな農家で、母屋の中に馬屋があったり、農機具が置いてあったりし、台所は土間だったそうだ。トイレや五右衛門風呂は離れにあり、その離れの中で最も立派な建物を、大人たちが「水屋」と呼んでいたという。東北地方などにみられる伝統的な間取りや、本論文の冒頭の例文(3)が想起される。

秋田（県北）の投稿者1名からは、「水道がある場所」を「みんじゃ」と言うとのコメントがあった。昔ながらの土間がある間取りの家で育ち、釜でお湯を沸かしていたそうだ。ちなみに炊事場全般は「でんどこ」と言うとのことだ。

岐阜の投稿者1名は「母屋の外にある水場」と述べる。古くからの家には屋内の台所の他に、屋外に山水や井戸水を引いた屋根付きの水槽のある場所があり、これを「水屋」と言うそうだ。大きな野菜を洗ったり、漬物を漬けたりといった大掛かりな台所仕事をす際に使用するのだという。家によっては大小の棚が設えてあったり、水屋を経て池に水が流れ込む仕組みになっていたりもするそうだ。

「台所」や「炊事場」の意味で「みじゃ」「みんじゃ」を使用したとの投稿もあり、秋田県の「みんじゃ」3投稿が目立つ。九州の中年層女性からは、昔の間取りの家で昔使用していたとの投稿があった。トピック主自身も九州の中年層女性で、ふと台所を「水屋」

と言いそうになって昔の家の間取りや祖母や母を思い出したことがトピック投稿のきっかけだったという。また和歌山の中年層の投稿者は、台所も食器棚も両方指すものとして「水屋」を現在も使用しており、婚姻の風習として水屋まわり（台所関係の家具など）は男性側が負担するのが常識だったと述べている。

なお、会社の台所のスペースや給湯室を「みずや」と呼ぶとの投稿も2件あり、掃除当番などで「水屋行ってきます」と言っているそう（東京、中年層）。関東では現在一般的な家庭の台所や流しを「水屋」とは言わないので、こうした職場の施設にだけ「みずや」を使用するのは興味深い。3.1でもオフィスの「お茶くみする場所」を福岡の投稿者が「みずや」と呼ぶと言っていたこともあり、会社の組織的あるいは人的流通で他地域から借用したのか、それとも（20）で柳田国男が記したような古い表現が化石的に残ったのかは不明だが、現代的な施設にもこうした名称が使われているという情報は貴重だ。

食器棚、食器収納家具を挙げる投稿が、91投稿と多かった。地域は明記されている範囲で言うと、愛知、北陸、近畿（関西）、中国、四国、九州で、やはり主に西日本である。「みずや」だけでなく「みずやのたんす」、「みじや」・「みーじゃ」（関西）といった形も報告されている。なお北関東の投稿者1名から、家具屋に生まれた70代の母が食器棚のことを「みつや」と言っているとの情報も挙げられている。（10）の柳宗悦の随筆のように、家具屋の専門知識として食器棚の「水屋」が広く共有されていた可能性がある。

もちろん、茶道の「水屋」の投稿もあった（8投稿、新潟、中部地方、東京、神奈川など）。「茶箆筒」を挙げる投稿者も2名いる。茶箆筒としての「みずや」は、茶の間（居間）で卓袱台のそばに置いてある背の低い箆筒で、普段使いの湯飲みや急須を収納したり、菓子器におせんべい等を入れたものなども入れていたという。

一般に茶箆筒と呼ばれる家具は、茶道の水屋棚から発達し、茶器、菓子器、食器などをしまし、和室に置く家具として定着した。袋棚や違棚、引出しなどが組み合わさった機能的な形状を備えているものが多い。また櫛や紫檀などを用いた立派な家具であることが多いが、家庭用には簡素な物もみられる。

図4は1909（明治42）年の『室内装飾家具図説 一名・製具指針』にある「茶箆筒」である。上段に袋棚、中段に違棚、観音開きの戸や引出しなどが組み合わさっていることがわかる。また図5は1926（大正15）年の『最新和風家具設計製作及仕上法』にある「嶄新なる茶棚」の図である。この本では「茶棚」と呼ばれている、茶道具収納のための家具として、茶箆筒と等しいものも掲載されているが

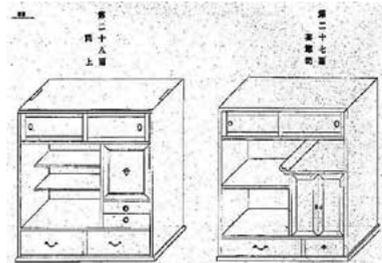


図4 茶箆筒の例(井上1909: p.35.)

て、茶箆筒と等しいものも掲載されているが（pp.99-101）、特に図5の「嶄新なる茶棚」

は「今日世人の最も好愛する所の物にして、是が大は高さ三尺、前巾二尺五寸、奥行一尺三寸の物にして、箆筒組とす」、「袋戸は左右に引分くる様造られたる巻込戸」、「引違戸は模様入の硝子戸とし、内部には一枚の違棚を設く」と説明されている。違い棚が中段の内部にあり、中段右側には俵鈍（はめ込み戸）があるなど茶箆筒の特徴も残るが、中段にガラス戸があるところは前節の図3-2でみた「みずや」の形状にやや似てきている。

こうした茶箆筒が、茶の間に置かれて日常に飲む茶や急須と茶菓子をしまう家具になっていき、さらに日常の食器や食品をしまう庶民的な家具へと発展したのだろう。

なお、同時期の帝国建築協会による1925（大正14）年の『現代日本家具図案百種』の目次では「第八章 茶棚類」と「第十一章 水屋棚類」が分けられている。茶棚（図6）は図4とあまり違いがないが、図7の水屋棚類は図5と同様に全ての棚に戸がつき、違い棚は無くなっている。また図1の高さ3尺（約90cm）の水屋棚よりも、高さ約4尺（約120cm）、巾3尺5寸ほどと、やや大型化している点で現代の食器棚に一步近づいたと言えそうだ。



図5 嶄新なる茶棚の略図
（佐藤1926: p.102, 図46を模写）

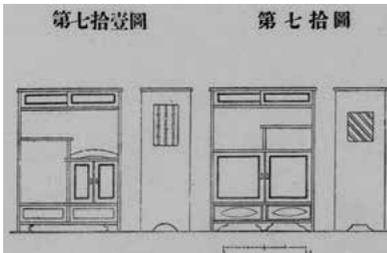


図6 茶棚類の例
（帝国建築協会編1925: 第70,71図）

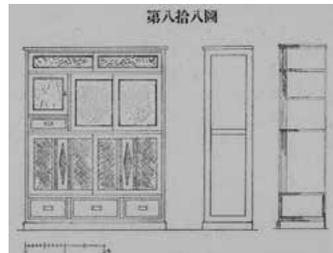


図7 水屋棚類の例
（帝国建築協会編1925: 第88図）

4. まとめ

「みずや」（水屋）について、辞典の記述、近代小説の用例、ウェブ投稿などから考えてきた。おそらく水を扱う場所といった意味が元であり、そこから風呂などのある離れの建物、流しのある場所や炊事場・台所の名称などになったと考えられる。流しやその周りにある食器を収納する家具については、茶道の「水屋」が影響しており、茶道の水屋に設える水屋棚から、作り付けではない置水屋、水屋箆筒、茶箆筒、茶棚などと呼ばれる家具が派生的に生み出され、こうした家具が形状でも名称でも家庭の日常遣いの食器棚としての「みずや」（水屋）のモデルであったと思われる。時代ごとに家の間取りとそれぞれの

場所の機能、家具の形状や機能、茶道を嗜む人口などが徐々に変わっていくのに従って、「みずや」という名詞が指すものも徐々に変わっていった。

水を使う場所や炊事場、台所などの意味の「みずや」「みんじゃ」「みじゃ」などは、秋田など東北日本海側あたりや九州の老年層に存在する。ただし家屋の間取りの変化も加わって若い世代は使用しなくなり、「懐かしいことば」と認識されるようになっていて、衰退しつつあるといえる。辞典に記載のあった富山県五箇山の「メージャ」や長野県秋山の「メッチャ」、柳田国男による下総の「御水屋」の指摘など、中部地方や関東地方でも古くは台所の意味の「みずや」があったが、早くに廃れて「台所」「お勝手」などに置き換わり、「みずや」は祭りの言葉やオフィスの給湯室などの名として化石化した可能性がある。一方、西日本では台所が近代化していく途中で、食器などの収納家具としての「みずや」が日常的なものとして広まった。普及が進むにつれ、家具のサイズが大きくなったり、蠅帳の機能が加わったりしていったが、さらに台所がダイニングキッチンになり設えが洋風になっていく過程で、新たな形状の食器収納家具を「みずや」とは呼ばなくなり、「みずや」という名はモノの衰退とともに名も消えつつあるといえる。ただし、中には古い食器棚を大切に使い続けて「みずや」と呼び続けている人、あるいは新たな形状の食器収納家具をも「みずや」と呼んで、「みずや」の範疇を広げ、今も使い続けている人も存在するかもしれない。

もう一つ付け加えたいのは、食器を収納する家具の名として茶道用語の「水屋」が選ばれた理由である。明治以降昭和あたりまで、茶道が上流の文化として教養ある女性や妙齢の女性に選ばれるものであったということが関係するだろう。茶の湯は武家社会では男性の嗜みであったが、例えば跡見花隠が1875（明治8）年に跡見学校（後の跡見女学校）を開校した際、科目の中に裁縫、插花などとともに入茶を加えたこと⁽⁹⁾からわかるように、茶道が近代の女子教育に組み込まれた。時代を下っても、生け花などとともに入茶修業のひとつにもなるなど、茶道は上品さを身につけたい多くの女性たちに好まれ、習い事として選ばれていた時期があった。地域によっては食器棚の意味の「みずや」は女性しか言わない語だということもあると聞かすが、それはこういった上品なふるまいや言葉遣いを志向する女性たちが家庭の一家具を茶道のことばで呼ぶことを好んだということもあるかもしれない。また当時はジェンダー的に食器類や食品などを収納する家具に言及する機会自体が女性に圧倒的に多かったことなども関係しているのではないだろうか。

ただし今も食器棚の意味で「みずや」を使用する人の多くは、茶道との関係を意識することはあまりないだろう。日常の語として、日常的に飲む茶や湯飲み・急須、日用の食器などを入れ、菓子や乾物などもストックし、一時的におかずなどを入れる通気性のよい部分が付いていることもある、引き戸の木製家具を「みずや」と呼んでいる。具体的な物の成立・定着・衰退とその名称の普及・衰退の関係を示す現象、また「筆箱」や「下駄箱」

などと同様に、一旦用途が分化して日常の語として定着すると、その名から想起する物は限定され、語源意識が消える現象の好例といえるだろう。

注

- (1) 運送業界の業界用語である、貨物利用運送事業者（荷主の需要に応じて有償で他者に運送させる業者）としての「水屋」は含まれていない。
- (2) 『日本国語大辞典 第二版』と『日本方言大辞典』の記述や用例出典には重なりがあるが、『日本国語大辞典 第二版』は「方言」として6つの意味をたて、〈1〉食器などを入れておく戸棚、〈2〉炊事場、〈3〉台所の流し、〈4〉箕の水を受ける水槽のある所、〈5〉水車、〈6〉貝、なめくじ、の順に並べている点で、『日本方言大辞典』と異なる。『日本方言大辞典』のほうが意味の分類が2つ多く、また配列も分布域が広い順になっているようなので、本文では『日本方言大辞典』のほうを示した。
- (3) 愛媛県大洲は「ハイラズ」が「食品戸棚」として記されている。食器棚として「はいらず」を使用する地域もあるのだが、ここでは「食品戸棚」として記されていたことを挙げておきたい。
- (4) なお、人情本コーパスには1例、太陽コーパスには4例の「水屋」の用例があった。茶道の水屋あるいは水屋棚か水屋箆筒に当たる例（3例）、水を商う者の例（1例）、文脈不足で判断できない例（1例）であった。
 - ・『（略）それより此の茶碗は何だらう。』と、水屋から茶碗を出して見せる。
（寛江舎蔦丸・十字亭三九『深契情情 恋の若竹』初編巻之三、第五套（天保4（1833）年刊、江戸）〔茶道の水屋棚あるいは水屋箆筒か。寛江舎蔦丸は出身地不詳、十字亭三九（十返舎一九二世）は東京上野出身。〕
 - ・新涼や衣更へたる水屋者 乙字（『太陽』1909年第14号、「秋六十句」）〔水を商う者か。大須賀乙字は福島県出身。〕
 洒落本コーパス（ver.0.5）には「水茶店」や「だいどころ」「おだい所」などしなく、「水屋」「みづや」等の用例は得られなかった。
- (5) 宮本百合子の作品や「獄中への手紙」には「水屋」がほかに4例使われているが、このうち4例は柳瀬正夢の絵画のタイトルで、水を商う人のことではないかと思う。
- (6) 関西人も知らない関西弁「みづや」、その意味と由来（2021年6月28日18:45配信）
<https://www.lmaga.jp/news/2021/06/245499/>（2022年1月3日閲覧）
- (7) <https://news.yahoo.co.jp/articles/1e0c650d9719b07c953fca8e2a689b250ed28502>
（2021年10月3日閲覧、なお2022年1月3日には閉じられていた。）
- (8) <https://komachi.yomiuri.co.jp/topics/id/606614/all>（2022年1月3日閲覧）
- (9) 学校法人跡見学園「跡見学園の歩み 学祖・跡見花蹊」参照。
<https://www.atomi.ac.jp/progress/atomikakei/>（2022年1月3日閲覧）

(28)

参考文献

- 井上繁次郎 (1909) 『室内装飾家具図説：一名・製具指針』博文館
info:ndljp/pid/847694 (国立国会図書館デジタルコレクションを利用、2021年12月30日
閲覧)
- 相賀徹夫編 (1984) 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』小学館 (コトバンクを利用、2021
年12月30日閲覧)
- 大西一嘉他 (1996) 「兵庫県南部地震における人的被害に関する研究」『地域安全学会論
文報告集』 (6)、地域安全学会、p.172.) info:ndljp/pid/10503962 (国立国会図書館デ
ジタルコレクションを利用、2021年12月30日閲覧)
- 佐藤巳之吉 (1926) 『最新和風家具設計製作及仕上法』中央工学会
info:ndljp/pid/1020114 (国立国会図書館デジタルコレクションを利用、2021年12月30
日閲覧)
- 尚学図書編 (1989) 『日本方言大辞典』小学館
- 大和町総務まちづくり課他 (2012) 「2011・3・11東日本大震災の記録：観測史上最大マ
グニチュード9.0」宮城県 info:ndljp/pid/10404065 (国立国会図書館デジタルコレ
クションを利用、2021年12月30日閲覧)
- 帝国建築協会編 (1925) 『現代日本家具図案百種』帝国建築協会
info:ndljp/pid/967869 (国立国会図書館デジタルコレクションを利用、2021年12月30日
閲覧)
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大
辞典 第二版』小学館
- はるき悦巳 (1998) 『じゃりん子チエ』2巻・5巻、双葉社 (双葉文庫名作シリーズ) (初
出は『WEEKLY漫画アクション』1978年以降)
- 平山輝男他編 (1992-1994) 『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 福岡管区气象台他 (1999) 「1997年3月26日と5月13日の鹿児島県薩摩地方の地震調査
報告」(福岡管区气象台・地震津波監視課・鹿児島地方气象台・熊本地方气象台)、
『駿震時報』第62巻 (1-4)、気象庁 info:ndljp/pid/11717840 (国立国会図書館デジ
タルコレクションを利用、2021年12月30日閲覧)

謝辞

本稿では全文検索システム『ひまわり』 (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>) および青空文庫パッケージ (青空文庫 <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>) を利用させていただいた。また国立国会図書館デジタルコレクションでは、貴重な古い資料を閲覧させていただいた。感謝申し上げます。